

五島初の「ナガサキ原爆写真展」開催

写真資料調査部会メンバー
＝展示会場にて＝

長崎平和推進協会と写真資料調査部会は五島市で初めての「ナガサキ原爆写真展」を三月一〇日から二十四日までの二週間、長崎県、五島市と共催して五島市三尾野の福江総合福祉保健センターで開催しました。

五島市にはおよそ七〇〇人の被爆者が生活しています。平成二十四年六月から国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館が被爆者のための「被爆者健康講話」を毎月一回開催し、この集いには毎回二、三十人の被爆者が参加されています。そこで、被爆者の皆さんがせっかくならば会場に足を運ぶのだったら被爆写真も見ていただこうと、長崎平和推進協会事務局の尽力で実現したものです。

会場には昨年八月に「登録記念物」として文化財に指定された被爆遺構「旧城山国民学校校舎」「旧長崎医科大学門柱」「浦上天主堂旧鐘楼」「山王神社二の鳥居」の、それぞれの被爆前、被爆時の惨状、現在の姿を中心に展示しました。また、会場入り口には原爆投下直後のキノコ雲と、原爆を投下した米軍爆撃機B29の写真、また吹き抜けロビー2階壁に爆心地を写した幅3.5メートルの大型パノラマ写真一点、それに

長崎平和推進協会が所蔵する巡回展示用パネル写真合計四十五点を展示しました。写真資料調査部会ではこれまで多くの原爆写真展を開催してきましたが、主として個々の建物の被災状況の写真が中心でした。しかし被爆以前や、被爆遺構の現状も展示してほしいとの要望をこれまでに度々受け、被爆遺構が登録記念物に指定されたのを機会に、六十九年前の惨状だけでなく、被災前、それに現在の姿を含めた原爆写真展が、今回初めて実現しました。

深堀好敏部会長は「長崎に原爆が落とされて今年で六十九年目、核と人間は共存できないということを写真展に足を運び考えていただきたい。」と取材に訪れたテレビ局や新聞記者に語りました。また展示写真の説明は写真資料調査部会の堀田武弘、峰下正道を含め三人で担当しました。

会場を訪れた被爆者のひとりには「五島でこんなに身近に原爆写真が見られるとは思わなかった。展示写真を見ると、当時はこの世のものは思われぬような悲惨な惨状、まるで地獄絵ですね。」と語り、この他にも岐宿町から訪れた男性は、「父親は三菱で働いていた。原爆が落とされた日、稲佐山高射砲部隊にいた叔父が原爆の事を知らせてくれたので、急いで村の人々と船を調達して四日後、長崎の飽ノ浦に行きました。五島には進学のため長崎で学ぶ生徒や、学徒動員として三菱等の軍需工場で働いていた子どもたちもいたのです。」と展示の写真を見ながら語っていました。

またこの人は当時の五島での出来事を、「七月頃、岐宿町や富江町にも米軍の戦闘機が低空で飛んできて機銃掃射したことがあり、この時は逃げまどい怖かった。」と真剣に話されました。



原爆関連写真収集すすむ 爆心地写した横5.4m超大型パノラマ写真作成

五島では初めての原爆写真展とあってマスコミの関心は高く、テレビではNHKとNBC、KTN、NIBの民放三社、それに地元の福江ケーブルテレビ合わせて五社が取材に訪れ、それぞれローカルニュースで放送しました。また新聞社も長崎新聞、西日本新聞が取材しました。会場を訪れた人は、「写真展をテレビで見ました」「新聞で知りました」という人がほとんどで、マスコミの協力が写真展成功の大きな力となったようでした。

なお写真展最終日の三月二十四日には長崎平和推進協会継承部会の丸田和男氏が被爆体験を語りました。



写真資料調査部会が所蔵している長崎原爆関連写真は、およそ四〇〇〇点余りになります。これらの写真の多くは昭和五十六年に発足し、深堀部会長らが結成した「長崎の被爆写真調査会」所蔵の写真で、この中には故荒木正人元部会長らが苦心して収集した貴重なものが含まれています。

主なものとしては、長崎市役所前にあつた写真館の主人で、終戦直後から被爆惨状と復興を撮り続けた小川虎彦氏のオリジナル写真アルバム。荒木氏や深堀部会長らと親交のあつた、朝日新聞社・松本栄一氏の被爆惨状を撮影したオリジナルプリント。米軍上陸後、監視のもと原爆映画を撮り続けた日本映画社にスチールカメラマンとして同行した林重男氏の写真などがあります。

地上から撮影したきのこ雲で鮮明なものとして唯一ともいえる松田弘道氏の香焼島からの写真。原爆搭載機群が撮影したのとしては、カラー16ミリ映画からプリントしたテナアン島で積み込まれるパンプキン色の長崎原爆ファットマン。原爆炸裂後、浦上から立ちのぼり始めるきのこ雲の複数写真。それらには浦上川河口が写り、まさしく原爆は長崎市民の頭上に投下されたことが分かります。また写真の専門家として知られる、元副部会長の堺屋修一氏の収集写真三六〇枚も収蔵されています。これらは公開しており、毎週月曜日午後一時から長崎原爆資料館の一室で開く例会に來ると、ロッカーに整然と整理されている原爆写真

をご覧ください。

写真のほとんどはパソコンプリントサイズで言う「2L」サイズ、かつてのサイズでは「キャビネサイズ」の手ごろな大きさで、写真にはキャプション、つまり説明文もついています。

写真資料調査部会では毎年、長崎市周辺の小・中学校高等学校で校内原爆写真展を、さらに八月に入ると「原爆の日」を中心に国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館を会場に毎年テーマを決め所蔵の中から厳選された写真をA3サイズ、あるいは半切サイズに引伸拡大して写真展を開催しています。



2011年度 校内原爆写真展



展示用写真としては現在300点余りを準備していますが、さらに充実を図り、今年三月に出来上がった新しいパノラマ写真は、爆心地帯を写した横5.4m、縦85cmの特大写真です。この写真は日本映画社の撮影班に同行したカメラマンの林重男さんが、原爆投下から間もない昭和二十年十月頃に、城山町八幡神社裏の高台から爆心地方面を写したもので、北は山里国民学校・浦上第一病院（現在の聖フランシスコ病院）、南は鎮西中学（現在の活水中・高校）から長崎医科大学附属医院（現在の長崎大学病院）まで南北2キロ余り、手前には城山町の柱一本残っていない市営住宅跡が写り、見渡す限りの廃墟が広がっています。

これまでに展示してきた写真は建物、施設の一つ一つを写した『点』の廃墟写真でしたが、今回作成した超大型パノラマ写真は『面』となり、一見して原爆の威力、残酷さが一目瞭然です。

写されている主な建物の廃墟は北の方から浦上第一病院、山里国民学校、長崎工業学校、城山市営住宅、城山商店街、長崎刑務所浦上刑務支所、浦上天主堂、城山国民学校、長崎医科大学、長崎医科大学附属医院、浜口町高台、浜口・岩川町廃墟、鎮西中学校等です。

林氏のパノラマ写真は城山小学校平和祈念館でも展示されています。間近で見ると超大型パノラマ写真からは破壊された街の細部が見え、全く違った原爆の脅威が感じられます。



**深堀部会長・今年度もアメリカ国立公文書館で
長崎原爆資料写真等の調査へ**



米国国立公文書館内での作業風景

日まで行われ、長崎に帰ってくるのは六月三十日の予定です。

昨年はアメリカ政府の事情で国立公文書館での調査活動が一日のみで終わりました。しかし、わずか一日の調査でも被爆状況を医療面から調査に来たアメリカの医師・ポール・ヘンショー博士撮影の部会未所蔵の写真を見つけ出しています。今年度は昨年引き続き調査活動を行いますので、大きな期待がもたれています。

長崎市が被爆七十周年に向けて取り組んでいる長崎原爆資料写真の調査収集事業が、昨年度に引き続き今年度もアメリカ国立公文書館で行われます。調査にあたるのは長崎原爆資料館の奥野学芸員と深堀部会長の二人です。成田出発が六月十三日、ワシントンでの調査は現地時間六月十六日から二十七

夏のナガサキ原爆写真展
「未来への遺産」
2014年8月1日~31日
国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館
B2F交流ラウンジ

今月の写真



原爆被災前の山王神社 二の鳥居 地元警防団 記念写真

この写真は昭和十四年に山王神社二の鳥居をバックに記念写真に納まった、地元町内の警防団の人たちである。この年、浜口町では警防団の分団が結成され、必勝祈念だろうか、山王神社に参拝したおりに撮影されたと思われる。

寄贈者は、「この中には原爆で斃れた人も多数いらっしやるだろう。この写真を見たい人もまだ多くいらっしやると思う。」と語られていた。おそらく原爆で破壊される前の数少ない二の鳥居写真と思われる。

この写真は昭和六十年に傘屋を営んでいた地元浜口町住人が、当時の長崎国際文化会館原爆資料室に寄贈したもの。寄贈者は徴兵された北松浦郡吉井村にいたため原爆の惨禍から免れたということである。登録記念物の指定された山王神社二の鳥居、現地の説明板の写真には、人物部分がトリミングされ、鳥居のみが使用されている。

なお、山王神社は明治十七年に「県社 浦上皇太神宮」となり、地域では「山王さん」の愛称で親しまれている鎮守の社である。かつての神社参道には、一の鳥居から四の鳥居まであったが、原爆により一の鳥居と二の鳥居を残し二つは倒壊、戦後、商店街の中に残っていた一の鳥居も交通事故に遭って倒壊し姿を消した。大正十三年に建立された二の鳥居は、爆心側の左半分が吹き飛ばされたが奇跡的に右半分だけが倒壊を免れ、被爆した当時の姿、一本柱のままでも現存も継続している。なお山王神社境内には「被爆くすのき」として知られる大木二本がそびえ立っている。

(写真提供 長崎原爆資料館)

今年の中学校原爆写真展は 6月に純心中学・女子高校、 7月に長与町立高田中学校 で開催



純心中学校・純心女子高等学校

また、高田中学校は二度目の開催となり、今回は新しく収集した写真、資料を中心に展示します。原爆投下当時まだ高田中学校はありませんでしたが、「長与国民学校高田分校」(現在・町立高田小学校)は被災地に隣接した学校として、救護活動が行われました。

この学校に避難した一人が詩人福田須磨子であり、自著「われなお生きてあり」の中で、八月九日夜の高田国民学校の悲惨な状況を記しています。



長与町立高田中学校

純心高等女学校(当時)では、女学生たちが「純女学徒隊」「純女報国隊」の腕章を巻き、学校前にあった三菱兵器大橋工場に隣接する、三菱長崎造船所大橋部品工場へ動員され、原爆により二三人が殉職しています。会場には当時の江角ヤス校長や、純心の愛唱歌「燔祭の歌」を永井隆の依頼で作曲した木野普見雄の手記等を展示する予定。

